

亜洲梁山泊 骨太社長塾レジメ

大崎玄長

1. 課題図書 : ものぐさ精神分析 (著者: 岸田秀、中公文庫)

2. 選定の理由:

今回のレジメ担当の大崎が20代の後半に読んでかなりの衝撃を受けた書籍。端的には、

- ・ 現在、自分はこのように考えているが、それはなぜそう考えるにいたったかの背景分析。
- ・ 例えば、あの人はいま、こう発言しているが、それはなぜそう発言するのかの背景分析。
- ・ 現在、あの人と自分の関係は、このような状態になっているが、それはなぜかの要因分析。
- ・ 世論や世相は、現在、このようになっているようだが、それはなぜかの情勢分析。

などなどが、少しはできるようになり(?)、いろんな物事に対して冷静な対処も可能になり(?)、自分を取り巻く環境を客観的に分析するための「視点」や「きっかけ」を与えてくれた本であるため。

直接的な効果としては、恥ずかしい話、私自身20代の後半までは、目に見えないもの(例えば、幽霊、オカルト、あの世の話)などについて「ホントにあったら怖いよ」などの気持ちがあったが、この本のおかげで、一切そういう気持ちはなくなり、逆に「ああ、人はこういう話を怖いと感じるのかあ」「こういうブームがおきる原因はこうことかなあ」などに変な分析までする余裕が持てたことがありがたかった。

なお、この書籍の根底を貫くメッセージ「すべては幻想である(唯幻論)」に関しては、読者によっては「なるほど面白い」という高い評価から「まったく面白くない」「極論」「偏っている」という低い評価まで、アマゾンの読者レビューでも賛否両論が極端に分かれている。

私自身も、20代の後半に初めて読んだときは「かなりの衝撃」であったけど、今回の社長塾に際して、改めて読み直したところ、「まあ、そうだよね」という感じで、二度目の衝撃はあまりなかったのも不思議な感じがしたが、一度は読んでおいて損はない本として、今回、課題図書として選定した。

3. 著者紹介(ウキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/岸田秀> より):

岸田 秀(きしだ しゅう 1933年12月25日-)は、日本の心理学者、精神分析学者、思想家、エッセイスト、和光大学名誉教授。著書は『ものぐさ精神分析』など多数あり、週刊誌等に対談・エッセイなどで登場することも多い。新しい歴史教科書をつくる会の賛同者として、産経新聞にコメントを寄せたことがある。

(年譜)

香川県善通寺市に生まれ、香川県立丸亀高等学校を経て早稲田大学文学部心理学科を卒業する。同大学大学院修士課程修了後、ストラスブール大学大学院留学、その際、同大学院を「卒業」したと思って

いたが、博士号取得の有無を確認していないという。1972年から2004年まで和光大学教授を務めた。雑誌『現代思想』によって思想界にデビュー。1978年に出版された『ものぐさ精神分析』はマスコミを中心に話題となり、当時の思想界の若きスターだった柄谷行人も岸田の理論には注目していた。また、岸田の理論を信奉した伊丹十三は、岸田をメインにすえた思想雑誌『モノクル』を刊行した。1980年代に到来する「ニュー・アカデミズム」の先駆とでもよべる人物であり、また、学者・研究者としてどの学会にも属していない。

(思想)

岸田は、ルイス・ボルク(en:Louis Bolk)の胎児化説やアドルフ・ポルトマン(en:Adolf Portmann)の生理的早産説などを統合したアルノルト・ゲーレンの「欠陥生物」論をうけて「人間は本能の壊れた動物である」とし、自我、家族、国家に及ぶ独自の思想、「唯幻論」を『ものぐさ精神分析』(およびその原点となった雑誌掲載の論文「日本近代を精神分析する—精神分裂病としての日本近代」など)で提唱する。例えば日本はアメリカによってレイプされたと、暗喩し白旗の起源や日章旗の日の丸が血を意味している、つまり無理やり開国させられたのことは象徴的だということになど。常識として疑われることなく通用している意味、観念を幻想といいきり、徹底的な相対化をおこなう、いわば「価値の紊乱(びんらん)」にこそ、この思想の独創性が見出せる。語り口の痛快さによって多くの読者を得て、80年代前半の思想界の注目を集めた。

『ものぐさ精神分析』を出版した際、「自分が言いたいことは一つしかない、著作はこの一冊でお終いだ」と宣言し、実際『ものぐさ精神分析』における唯幻論の思想はその後とも変わらず一貫性を保っている。ただし、著作は多くの読者を集めたことからその後多数出版している。その後の著作で、岸田はその「唯幻論」を、自分と両親との間の特殊な関係性を説明するために考え出したと記している。

(著作) 単著

『ものぐさ精神分析』(青土社、1977年)
『二番煎じ ものぐさ精神分析』(青土社、1979年)
『出がらし ものぐさ精神分析』(青土社、1980年)
『ものぐさ精神分析』正・続で再編し中公文庫
「岸田秀コレクション」で全19冊が刊(青土社、1992-98年)『希望の原理』(朝日出版社、1985年)
『不惑の雑考』(文藝春秋、1986年) 『嫉妬の時代』(飛鳥新社 1987年)『ふき寄せ雑文集』(文藝春秋、1989年) 『フロイドを読む』(青土社、1991年)『ものぐさ箸やすめ』(文藝春秋、1993年)
『幻想の未来』(青土社 1993年)『母親幻想』(新書館 1995年)『心はなぜ苦しむのか』(毎日新聞社 1996年)『二十世紀を精神分析する』(文藝春秋、1996年)『官僚病の起源』(新書館、1997年)、のち「歴史を精神分析する」中公文庫 『「日本人の不安」を精神分析する 唯幻論で読み解く現代』(大和書房 1998年) 『性的唯幻論序説』(文春新書、1999年) 『幻想に生きる親子たち』(文藝春秋 2000年)
『日本がアメリカを赦す日』(毎日新聞社、2001年) 『古希の雑考』(文藝春秋、2004年)のち文庫
『唯幻論物語』(文春新書、2005年) 『岸田秀最終講義 DVD本』(Id 2006年)
『嘘だらけのヨーロッパ製世界史』(新書館 2007年) 『「哀しみ」という感情』(新書館 2008年)
『唯幻論大全 岸田精神分析 40年の集大成』(飛鳥新社 2013年) 『絞り出し ものぐさ精神分析』(青土社 2014年) 他

4. ものぐさ精神分析の概要

書籍自体が文庫本で 429 ページとボリュームがあるも、実は著者である岸田秀自身が、415 ページから始まる「あとがき」で「雑文を集めたので同じようなことを繰り返し書いていて多過ぎる」と述べ、大切な章の順番として、下記を列挙しているの、今回の社長塾でも、主に下記の章を中心に概要を紹介する。

第1分類 歴史について から

P.51 国家論（史的唯幻論の試み）

P.11 日本近代を精神分析する（精神分裂病としての日本近代）

第2分類 性について から P.164 性的唯幻論

第5分類 自己について から

P.333 セルフ・イメージの構造（主観と客観の逆比例の法則を提唱する）

第3分類 人間について から P.219 時間と空間の起源

なお、書籍の中で配置されているページが前後しているのは、著者である岸田秀自身が、大事としている順番である。

1) P.51 国家論（史的唯幻論の試み） 概要 （ここに著者の主張の根幹がある）

「人間は生物進化の畸型児（きけいじ）である」

通常の生物（牛や馬）：生まれて間もなく自分の足で立ち、自分で食物を探し、自活する。

人間の赤ちゃん：ほぼ完全に無力・無能な状態で生まれ、自活できるまで長年、親が保護する。

↓

これは「猿」として早産している（A・ポルトマン説）か、

「猿」が胎児化して、猿が胎児のままそのまま大人になったのが人類（L・ボルク説）。

※他の哺乳動物に比べて、人間の体毛が少ないのも、「猿」として未熟状態だからとも言える。

生物であれば、「本能」に従って動くだけで、生きていくことができる。

しかし人間は、「自活できるまで長年、保護が必要」であり、実はその「保護」を受けている間に、

「本能」が壊れてしまう、という副作用があり生物としては常に「滅亡の危機」に瀕している。

※ なお「壊れた本能」のことを「エス」といい、「自然社会という現実」から切り離された保護の間に錯覚する「(自分は) 全知全能」という「幻想（錯覚）」を意味している。

エス（壊れた本能）は「私的幻想」であり、私的幻想に自閉していても、

誰か（例えば親）の保護がある限り、その人間は（大人になっても）生きてはいける。

しかし現実（自然）は、誰かの保護もせいぜい何年かであり、
結局のところ、人間はエス（私的幻想）をもったまま、現実（自然）に向き合わなくてはならない。

生物が、誰からも教えられず本能として持っている種の保存という機能も、
エス（壊れた本能）しか持っていない人間には、わざわざ誰かが教え込まなければならない。

→ ここに文化が発生する。（家族とはこうあるべき、夫婦とはこうあるべき、という意識付け）
ただし自然という現実いきなり直面しては、エスしかない人間は存続できないので、
社会という擬似現実（共同幻想）を構築して、エスしかない人間同士で存続できるようにした。

→ それをより拡大したものが「国家」。エスしかない人間集団でも、より存続しやすくするため、
より大掛かりに社会という擬似現実（共同幻想）を構築した状態が「国家」。

ただし、社会や国家という擬似現実（共同幻想）は、生物の本能に基づいたものではないため、
常に「不安定」であり（社会とは、私的幻想と共同幻想の妥協の産物）、
各人に共有された共同幻想は超自我及び自我となり、
共同化されずに残った私的幻想はエスを構成する。

このエスが、共同幻想に基づく集団の統一性を内部から危うくする重大な要因となる。

→精神病とは、社会の構成員の大部分が共有している「共同幻想」と、
その本人がもつ「私的幻想」の乖離が、特に激しい人のことを指す。

さらにA集団という擬似現実（共同幻想）と、B集団という擬似現実（共同幻想）でも、
その成員各自のエス（私的幻想）を共同化し得る部分が異なるであろう。

→たとえば、キリスト教の「処女懐胎」や「聖霊の復活」も共同幻想の一種といえ、
非キリスト教徒が自己中心観点に立てば「非科学的な妄想」としての一刀両断も可能である。

→たとえば、アメリカ合衆国独立宣言「自由・平等・博愛」も共同幻想の一種。
西側世界以外では「人は平等ではない」という論理（これも共同幻想）がまかり通る国もある。

→日露戦争や、第二次大戦もそれぞれの「共同幻想」のぶつかりあい。集団の統一性に重点を置き、
それぞれの成員の私的幻想をできるだけ多く共同幻想化しようとした結果、起きた。

（国家論の結論）

いずれにせよ、集団は、結成され、拡大し、分裂し、そしていつかは、外部からの攻撃がなくても、内部から崩壊する。そしてまた、新たな共同幻想に基づいて再生したり、別の新たな集団がつけられる。外敵の侵略がなかったのに滅亡した文明は多々あるが、それはその文明を支えていた共同幻想の崩壊の故であると考えられる。

2) P.11 日本近代を精神分析する（精神分裂病としての日本近代）

（結論）はじめに結論めいたことを言えば、日本国民は精神分裂病的である。しかし、発病の状態にまで至ったのはごく短期間であって、たいていの期間は、発病の手間の状態にとどまっている。だが、常に分裂病的な内部葛藤の状態にあり、まだそれを決定的に解決しておらず、将来、再度の発病の危険がないとはいえない。現在は一応、寛解期にある。

（きっかけ）1853年ペリー来航

江戸時代： 外的世界を知らないナルチズムの時期。いやなら鎖国も可能（内的自己）

開国後： 苦勞しらずのぼっちゃんが、いやな他人たちと付き合わなければ生きていけない状況に突然投げ込まれた状態（外的自己）

「内的自己と外的自己の分裂が、分裂病質の特徴」（R・D・レイン『引き裂かれた自己』）

攘夷論は「内的自己」、開国論は「外的自己」。

開国後も「開国は一時の便法にあり、本音は攘夷にある」や「和魂洋才」という分裂病質が存在。

皇国史観も誇大妄想体系であり、内的自己を支えるために構築された共同幻想。「純粹にして金甌無欠、神聖にして不可侵、無私無償の献身をささげる天皇像」は、内的自己の理想像。

征韓論その後の朝鮮政策は、外的自己と内的自己の自己同一性を立て直すために実行された。

欧米と日本の関係を、日本と朝鮮の関係にずらし、かつ日本は欧米よりも「良い」としたかった。

※ 欧米の植民地支配：現地住民を自分たちより一段下の「家畜」として扱う。

※ 日本の朝鮮政策：朝鮮人も日本人も「同じ」として同化政策を実施。

対米英宣戦布告はまさしく精神分裂病の発病。

これまでに無理やりにかぶせられていた偽りの自己の仮面をかなぐり捨て、真の自己に従って生きる決意をしたときがすなわち発狂なのである。外的自己と内的自己の分裂が悪循環的に進行し、外的自己が内的自己にとって耐え難く重苦しい圧迫となって限界に達したとき、それまで内奥に隠されていた内的自己が、その圧迫を押しつけて外に表れたのである。

バンザイ突撃や神風特攻も、純化した内的自己の表れ。姿は壮烈だが、戦争に勝つ（敵に損害を与える）という目的を脇に置いた行動であり、分裂病的自閉性の特徴でもある。こういうことを二度と繰り返さないためにも、それを賞賛したり嘲笑するだけではだめである。何よりもまず、日本人をしてそのような行動を思いつき、実行することを可能にした精神構造を理解しなければならない。

本土決戦、一億玉砕を叫んでいた日本人が一夜にして従順な平和主義者になったことも、分裂病質者に特有な態度の逆転が起こっただけ。大日本帝国の崩壊は、狂気の発作からさめた分裂病質者と同じで、それまで表に出していた内的自己を抑圧し、抑圧していた外的自己を表面に出しただけ。

国際連盟を颯爽と脱退しておいて、国際連合へ熱心に加盟切望するのも、単なる逆転現象。

戦後の経済成長は、抑圧された日本人の内的自己の表現の道。武力でだめだったことを経済力で成し遂げようという広範な暗黙の国民的合意によるものといえる。

結局のところ、日本人が日米戦争および経済成長によって解決しようとした問題、すなわち外的自己と内的自己の分裂の問題は、依然として解決されずに残っている。日本人の自己同一性は依然として不安定である。

3) P.164 性的唯幻論 (P.174 恋愛論も個人的にはお勧めしておきたい)

※本文では、少々、卑猥な表現が続くため、ここでは要旨部分のみを抽出した。

(主張) フロイドがはじめて気づいたことで、わたしもたびたび主張していることであるが、人間の性本能は無茶苦茶にこわれてしまっているのである。人類は、本能に頼っていたのでは、生殖行為を行うことはできず、滅亡してしまうだろう。人類が滅亡せずにすんでいるのは、子どもの出産につながるいわゆる正常な性行為なるものを一つの文化としてつくりあげ、それを各人に強制することにだいたいにおいて成功したからである。(中略) 人間のいわゆる正常な性行為と、他の哺乳動物の性行為とは(中略)、一見いかにも似ているが、似て非なるものとはこのことであり、そこには、いわば造花と自然の花との違いがある。いくら本物の花に似ていたところで、造花は造花である。人間の性欲に発情期がなく、年中いつでも性行為が可能なのは、それが造花だからであると思う。(中略)

造花なのだから、どんな花でもつくれるわけである。もちろん、正常な性行為だけでなく、同性愛も、フェティシズムも、窃視症も、露出症もそのほかすべて造花である。(他にも、他の哺乳動物ではありえない避妊 等の事例も列挙)

(以下、男女を正常な性行為に向かわせるための幻想として恋愛、婚姻、家族制度に関する解説が続く)

幻想にかり立てられているわけだから、男は、性行為がおわったとたん不可避免的に失望と空虚感に襲われる。性交のあと、男は悲しい。こんなはずではなかったという砂を噛むような思いである(ちょっとおおげさ過ぎるかな?)。あんな美しい女を抱けたらどんなにすばらしいだろうとあこがれながら(中略)、なにかの拍子でその女をものにできたとしても(中略)、幻想の「あの女」は、掴んだと思ったとたん指のあいだからすりぬけてどこか遠くへ行ってしまう。一人の女を征服すればすぐに別の新しい女を欲しがる男のドン・ファン的傾向を、できるだけたくさんの雌に自分の種を植えつけようとする動物としての雄の本能に由来すると説く人がいるが、わたしに言わせれば、男をそのような行動へかり立てるのは、本能ではなく幻想である。幻想にかり立てられているからこそ、永遠に満足はなく、えら得るはずのない実感を求めて次々と女を漁るのである。

(P.174 恋愛論より抜粋) いうまでもなく恋愛は幻想である。しかし、売買婚や売春、政略結婚や経済的理由による同棲よりも(金の切れ目が縁の切れ目とならないだけ)まだ安定した幻想といえる。

4) P.333 セルフ・イメージの構造（主観と客観の逆比例の法則を提唱する）

（主張）われわれは任意にどのようなセルフ・イメージでももつことができる。したがって、われわれの持っているセルフ・イメージは、われわれの実感の反映ではなく、われわれ自身にとっても、もっとも好都合なセルフ・イメージである。（中略）

たとえば、はた眼から見れば、しばしば攻撃的行動に走っているのに、自分はおとなしく平和的だというセルフ・イメージをもっている者に、その攻撃的行動を指摘すると、たとえば次のような反論が帰ってくる、「わたしは本来おとなしいのだが、あまりおとなしすぎるので、そこをつけこまれ、かきにかかってくる人がいるから、やむを得ずついカットとなってあんな行動にでてしまったのであり、あれは本来の私ではない」と。そして、「本来の自分」はおとなしい人間だというセルフ・イメージだけは微動だにしない。（中略）

したがって、セルフ・イメージは、その場で取ってつけた泥縄式の言いわけとは違って、当人のヴァイタルな欲望のみならず、（しばしば無意識的な）内面的思考過程に根深い根拠をもっており、他人にはいかに馬鹿げてみえようとも、ちょっとやそっとの説得には屈しないのは、そのためである。そのセルフ・イメージの不当性を非難されれば、当人は心の底から心外に思うであろう。（中略）

セルフ・イメージがどれほど客観からずれているからといっても、当人の「客観的な姿」については何の情報も提供しないということはない。まず、前述したように両者の間には逆比例の関係がある。平静な心で自分を反省してみて、自分はこうこういう人間だと思えるとき、他人の眼にはちょうどその正反対の姿が映っていると考えて間違いはない。次にたとえば、もろもろの歪曲過程を経て伝わっていた情報からのもとの正しい情報を推定するときのように、自己判断にありがちな誤りを消去してゆけばよい。さきにときおり述べたように、主観的解釈の要素をぬぐい取るのである。

5) P.219 時間と空間の起源

（主張）無意識においては時間が存在しないことをフロイドは発見した。無意識には矛盾がなく、抑圧がなく、すべては可能であり、空間の障壁も存在しない。無意識は、快感原則以外のいっさいの限定を受けない。無意識は否定を知らず、すべては肯定される。

意識においてはじめて時間が現れる。N・O・ブラウンはフロイドのこの発見を敷衍して、人間が時間を知り、歴史をもつようになったのは、抑圧する動物だからだと考えた。ライオンは本能を抑圧しない。ライオンは食欲を満足させるか餓死するかのいずれかであって、ウサギを前にして、腹は減っているが今回はがまんしておこうとあきらめたりはしない。人間以外の動物の本能は現実に密着しており、本能の満足は個体保存又は種族保存のために絶対に必要不可欠であって、逆にいえば、動物は、そのように必要不可欠な本能しかもっていない。それに反して、人間の欲望は、現実からずれて幻想と結びついているため、一億円あれば二億円にしたり、二億円になれば五億円にしたり、どこまでいっても満足を知らない果てしない渴望に変質している。

5. ものぐさ精神分析を企業経営に活用するために

1) P.51 国家論を「会社論」と置き換えて読んでみる。

「会社」という擬似現実（共同幻想）は、生物の本能に基づいたものではないため、常に「不安定」であり（「会社」とは、社員の幻想と共同幻想（経営理念）の妥協の産物）、各人に共有された共同幻想は超自我及び自我となり、共同化されずに残った私的幻想はエスを構成する。

このエスが、共同幻想に基づく集団の統一性を内部から危うくする重大な要因となる。

→「問題社員」とは、会社の構成員の大部分が共有している「共同幻想（経営理念）」と、その本人がもつ「私的幻想」の乖離が、特に激しい人のことを指す？

2) P.11 日本近代を精神分析する→自社の経営方針を精神分析する

自社の経営方針において、矛盾した「内的自己」と「外的自己」はないか？

何かプロジェクトに取り組むとき、それは「バンザイ突撃や神風特攻」のように、純化した内的自己の表れとなっていないか？（リスクとリターンのバランスを取っているか？）

3) 4) 性的唯幻論・セルフ・イメージの構造→社員のマネジメントや接し方のヒントとして活用
幻想にかり立てられているわけだから、「社員」は、「目標達成」がおわったとたん不可避免的に失望と空虚感に襲われる。「目標達成」のあと「社員」は悲しい。こんなはずではなかったという砂を噛むような思いである。

「社員」は任意にどのようなセルフ・イメージでももつことができる。したがって、「社員」の持っているセルフ・イメージは、「社員」の実感の反映ではなく、「社員」自身にとっても、もっとも好都合なセルフ・イメージである

5) P.219 時間と空間の起源 を「長期目標」の設定手法として考えてみる。

「経営者」の欲望は、現実からずれて幻想と結びついているため、一億円あれば二億円にしたり、二億円になれば五億円にしたりするように、どこまでいっても満足を知らない果てしない渴望に変質している。

→ 根拠のない拡大戦略に走っていないか？ 仮に拡大戦略を取るにしても、「熱くなり過ぎず」に「冷静に」「納得した上で」拡大戦略として取り組んでいるか？

6) その他、参加者からの感想やフリーディスカッション

7) 最後に、P.419 伊丹十三氏による解説

岸田理論には中心がない。全てが幻想であると知った上でのわれわれの行動規範は何なのだろうか。すべてが幻想であることを万人が納得した時、その地平の上に新たな共同幻想が生まれるのであろうか。われわれにできることはそれを待つことではない。そのためには、まず全てが幻想であるという事態を見つめることである。著者のいうとおり「見えないものはコントロールできない」のであるから。

以上